

# 尾崎士郎と橋本徹馬

——もう一つの政治運動——

都 築 久 義

## 懸賞論文・三位入賞

わが国が連合軍の占領下にあった時代、マッカーサー元帥が絶対的支配者として君臨していたことはいまなお記憶に新しいところである。

そのマッカーサーの占領政策は誤っている、と彼の本国アメリカの要路の人に進言しそれが『ワシントン・ポスト』や『ニューヨークタイムズ』で大きくとりあげられ、『マ元帥に抵抗した日本人』（『改造』昭27・4増刊号）ということで話題になったのが、紫雲荘主人・橋本徹馬である。同紙で、故・近衛首相の親友の時局評論家と紹介されたとのことである。

彼は昨年（昭和五二年）、福田首相を迎えて米寿を祝い、全国に支部を持つ宗教団体「紫雲会」を主宰し、時局

に対しても機関誌『紫雲』を通じて直言を行なっている。尾崎士郎がこの橋本と手紙の往復を始め、知己となったのは、彼が愛知二中（現・岡崎高校）の五年生のときだった。

「そのきっかけをつくったのは『世界之日本』という雑誌の懸賞論文」である、と尾崎は『私の履歴書』のなかで書いている。

『世界之日本』は大正四年七月号の創刊五周年に際して、記念行事の一つとして、和歌・俳句・論文の懸賞募集を企画した。論文の課題は「いかにして選挙権を拡張するか」。論文の選者は早稲田大学の永井柳太郎教授。

尾崎はさっそく論文に応募し、六月号で優秀作三篇のなかに入り、彼の、「まづ教へよ」は、渡辺敬天の「選挙法の改正と政治思想の普及」、加藤勘十の「拡張の範囲に就

て」と一緒に掲載発表された。

そして翌、七月号でいよいよ当選順位の決定。結果は尾崎は見事三位に入賞。後述の加藤は五位である。応募総数は三三八通だった。

このときが創刊五周年ということから察せられるとおり、『世界之日本』が発刊されたのは、明治四三年七月である。

初め中央青年会の機関誌『活青年』として出発したが、一年後『世界之日本』と改題され、発行所名も世界之日本社（東京市神田区猿楽町）と改名された。

ただし、「中央青年会は依然存在し世界之日本は之が機関に候而して本会は今後益々事業の遂行に努力云々」と「会告」にある。

中央青年会が設立されたのは「公民的国家を完成し、憲政有終の美を取めんと欲せば、先づ国民を教へざるべからず」の考えに基づき、「全国二万有余の青年会を誘導せんが為め」に生まれた。が、一周年にあたって「愈々益々吾人の活動範囲を拡張すべき氣運に向へるある」を思い「今や日本の地位は著しく進歩して昔日の如くならず。吾人須らく世界に於ける大国民たるの自覚あるべからず」と痛感して、ここに『活青年』を改題して、『世界之日本』にしたいと「本誌改題宣言」及び「中央青年会設立の趣旨」

『活青年』明44・6で述べている。

誌名の変更と同時に雑誌の大きさも菊判から大判（A4判）に変わり、主筆に五年間の欧米特派員生活から帰国してまもない、『万朝報』の茅原華山をむかえた。

改題一号（通巻・第二巻第七号）目次に目を通すと、茅原の「世界の日本とは何ぞ」、伯爵・大隈重信の「真に世界的日本たらしめよ」、拓殖局第一部長・宮尾舜治の「経済上より見たる世界の大勢」が並び、誌名にふさわしい論文が続いている。

もっとも、他にも同人の小説・史劇・漢詩・俳句・随想から読者文芸、同人諸家の「青年作家の眼に映じたる文芸院」も併載され、橋本も鉄山の筆名で「西郷南州の言行録を読む」を執筆していて、総合雑誌のスタイルをとっているから、当初は必ずしも政治的色彩だけが強調されたものではなかった。

常連執筆陣には、大隈重信、尾崎行雄、島田三郎、三宅雪嶺、安部磯雄、浮田和民、永井柳太郎が名を連ね、坪内逍遙の名前も見える。一瞥して明らかなおと、政界や言論界における大隈人脈や早稲田関係者がこぞってこれを応援したのである。

『活青年』を『世界之日本』に改題して半年後、橋本はいよいよ年来の宿願であった政界への進出を果すべく準備

活動に入る。

そして、明治四五年二月二十七日、立憲青年党の結成を宣言し、綱領を発表した。旗上げをしたのである。

我党が憲政ノ美ヲ濟シ国運ノ發展ヲ計ランガ為メニ成サントスル処ノ要領左ノ如シ

一、国民ヲ自覚セシメテ健全ナル与論ノ喚起ニ努ムル事

一、選挙権並ニ被選挙権ノ拡張ニ努ムル事

一、官僚政治ノ打破ニ努ムル事

発会式は三月五日。神田青年会に大隈重信、尾崎行雄、茅原華山らが臨席して盛大に行われた。

橋本の『自叙伝』（昭42・2、紫雲荘刊）に載っている記念写真には、「世に出でし最初の日」と記されているが、たしかに政治家への道を歩もうとする彼には、この日がその出陣式でもあった。

橋本徹馬は明治二三年二月四日、愛媛県新居郡大町村に生まれ、四〇年三月、西条中学校を卒業した。海軍兵学校を三回受験するも失敗。早稲田大学の学籍簿によれば、明治四三年四月、高等予科政治科に入学し同年九月、専門部

政治科に転科。一年次を修了して、四五年二月二十七日、すなわち立憲青年党の結成宣言の日に退学している。

この間に総長・大隈重信に厚遇を受け、大隈の政界人脈と深く接触するようになったと思われる。

立憲青年党の発足によって、『世界之日本』は必然的に同党の機関誌と化し、従来の総合誌スタイルと名士中心を廃して、「原敬征伐論」（明45・6）に見られるように、雑誌の立場と性格をこれ以後鮮明に打ち出していく。

立憲青年党が非政友会の大御所・大隈重信の庇護下になり、尾崎行雄や島田三郎の強力な後盾と支援によって成立した以上、党の立場が反政友会であり、尾崎が主導した憲政擁護運動や島田が活躍したシーメンス事件追及に積極的に参画したのはいうまでもない。

当然のことだが久し振りに大隈内閣が誕生（大3・4）するとこれを擁護し、逆に、「政友会罪惡史話」（大4・2）を特集したり、「国民党撲滅号」（大4・3）を出して、橋本は政敵や野党の攻撃に精力を注いでいた。

『世界之日本』が創刊五周年をむかえ、尾崎士郎が懸賞論文に応募するのは、まさにかような時期である。

しかし、橋本自身は、立憲の精神であり、彼の政治的信念であった選挙権問題や藩閥・官僚政治打破よりも、次項で詳述するように、しだいに対外問題に心を寄せ、とりわ

け「支那問題」に深くかわり始めた。あるいはそのことをめぐって社員・同志との間に確執を生じたのであろうか、創刊五周年の大正四年七月、彼は突然、自ら育てた『世界之日本』を去ってしまふ。(ただし、同誌は一二月号まで続刊)

したがって、尾崎が橋本と手紙をかわすようになるのは、実は橋本が『世界之日本』を離れた後のことである。

私は三河吉良郷にいるころから、この人の文章の持つ率直明快な調子に傾倒していた。手紙の往復をしているうちに、親愛感が次第に深まってきたのは当然である。おそらく橋本氏は私を一中学生だとは思っていなかったであろう。時には時流に絶した思いを訴えた長い手紙が届くこともあり、自分はむしろ何も彼も捨てて一介の乞食になりたい。あるいは襤褸をまとして放浪の旅程にのぼる日が近づきつつあるように思う。もし、そのとき貴兄に会うことができたら自分の運命にも新しい力を加えるかも知れぬ。云々。——こういう人間関係が、いかに青春を豊富にするかということには繰返えして説くまでもない。

私はむしろ、上京してすぐに橋本氏に会わなかった方がよかったように思う。橋本氏の手紙には必ず「尾

崎老兄」と書いてあり、私もまたこれに応じて、「橋本学兄」と書いた。生意気千万な小僧である。

(『私の履歴書』)

このとき橋本は二五才、尾崎はまだ一七才だった。

「生意気千万」といえば、そもそも中学時代の尾崎は、購読していた雑誌も大人や青年向けの政治雑誌であった。級友・杉山新樹(元・愛知教育大教授)が「校内雄弁大会で彼はいつも活躍していたが、大方の学生が英雄を礼賛したり、中学生らしく人生いかに生くべきかを弁じていたのに、尾崎はいつも天下国家を論じ、まるで政談演説会を聴いているようだった。弁論術のうまさというより、彼のしゃべっていることが、我々中学生の世界とはかけ離れていて、彼はク大人クだという印象を皆んに与えていた。」と話すほどである。

尾崎自身その頃の読書や心境を当時、次のように書いている。

『政治に志ある者に告ぐ』題は確かそうだったと思いますが、此一文が殊に深く私の心を動かしました。そして茅原と言ふ名前は臆気ながら私の小さい胸に刻みつけられました。即ち此一文は、将来私が政治家とし

て世に立たんと欲する基礎を作りました。(略) 中学に入ってから、種々な書物にも雑誌にも接しましたが、殊に先生の著書は最も熱心に心読致しました。然し此時分からそろそろ私は先生の思想に対して疑を起す様になりました。其後——一昨年『第三帝国』が発刊せらるるに及んで先生に憧憬する念が益々盛になると共に先生に不可解と疑問は益々募って来ました。

これは『第三帝国』の主宰者・茅原華山に宛てたものであり、茅原の判断で全文が、「東海道の一中学生」の匿名で、「中学と師範の改革」と題されて、同誌第三六号(大4・4・5)に掲載されたがその一部である。星董派的文学青年の雰囲気は微塵も感じられず、天下国家を論じて闊歩している政治青年尾崎士郎のさっそうとした風貌が彷彿してくるではないか。

さらに続けて彼は、「現代の最大急務は実に中学校の改革でありますまいか。退いては師範学校の改革ではありませんか。ああ吾れに言論の自由を与へよ。青年の時局を論ずるの何が悪い。」と訴え物議をかもしたという。

茅原華山と『第三帝国』に関しては、つとに松尾尊兌の岩波歴史叢書『大正デモクラシー』に、詳細な研究があり、この雑誌が「民本主義の歴史にとってみのがすことが

できぬ役割を果し」たことと、普選運動史上でも大きな役割を演じた雑誌であったことは松尾によって高く評価されている。

なお、尾崎は他に「帝国主義者に与ふ」(4・9・1)と「孝の新意義」(大4・11・11)も読者投書欄「戦闘曲」に投稿していることを付記しておく。

さて、尾崎士郎がこういう環境におかれかようなことを痛切に感じていたとすれば、彼がさきの懸賞論文で「まづ教へよ」と主張した理由もおおよそ察しがつくし、その論文で彼がなにを論じようとしたかも見当がつこう。

この論文は「与論政治は権力政治となり、平民政治は貴族政治となりて、立憲帝国の名は徒らに紙上に止まりて実際上終に憲政有終の美を期するの道なし。」と筆を興こし

立憲政治を行はんには先づ第一に其国民が政治的義務を充分に了解せざる可らず。何となれば国民にして政治的に国家に貢献する義務を知らずして、断じて立憲政治の実現せらる可き理由なければなり。而して我国の教育に於て立憲政治の実現に対し実に大なる妨害を与ふるものは現今行はるゝ教育制度なりとす。

と、説き「『先づ教へよ。然る後に与へよ』あゝ然らずん

ば、選挙権拡張は徒らに机上の空論として終るべきのみ。」と結んでいる。

ここで彼が公民教育の必要を強調する姿勢は前引の「中央青年会設立の趣旨」とも一致することはただちに判読できよう。尾崎の選挙権問題への関心と傾注はその後もゆるぎとなく持続され、この問題のために身を挺して運動に参画し普選運動史に貴重な一頁を残したことも特に強調しておきたい。

中学時代の選挙権問題を論じた文章に、もう一つ「尾崎行雄氏の為めに弁す——八月号を読みて岩崎英祐君に教ふ——」という、これも相当「生意氣千万」な一文がある。

尾崎行雄が、帝国大学、慶応義塾、早稲田大学のような多数の青年の修学している学校には第一着手として選挙権を与えてはどうか、と提唱したことに、明治大学の岩崎が「高商級の専門学校たる早慶両大学にのみ選挙権を与へんとす。咄々明大中央及其他の学校にも附与して敢へて何の不可あらんや」と、尾崎行雄を『雄弁』誌上で難詰した。

これに反駁を加えたのが尾崎士郎の右の一文で、『雄弁』大正四年九月号に掲載された。

岩崎英祐君足下

足下の尾崎行雄氏に与へたる一書は余りに感情に過ぐ

る事無き乎。議論は飽く迄議論を以て徹底せざる可らず。其間毫も感情の入るを許さざるなり。足下の文は直截簡明・立路整然、而して頗る精細を極めたるものなりと雖も其間終始一貫せる論者の感情的態度に至ては余輩の断じて首肯する能はざる所なり。

大学生を相手に堂々たるもので、まさかこれが田舎の中学生のものとは誰も信じなかつたであろう。

それはともかく、中学時代の彼の「作品」のなかからは、以上にあげたごとき政治的文章はいくつかあつても、いわゆる文学的なものは見あたらない。おそらく硬派の政治青年だった尾崎には、軟派な文学などは関心の外にあつたにちがいない。

かくして彼は大正五年三月、愛知県立第二中学校卒を業として、躊躇することなく早稲田大学高等予科政治科に進んだのである。

### 『一大帝国』と立憲青年党

橋本徹馬が『世界之日本』にかわつて、『一大帝国』第一巻第一号を世に送つたのは、大正五年三月一日である。

日露戦争で戦功のあつた秋山真之將軍の命名になる「一

大帝國」の筆文字が、大判（A4判）の真紅の表紙に白く抜かれた創刊号は鮮烈な印象を与え、本文八〇頁の、巻末数頁にわたって登載された大隈内閣与党所属代議士や城南荘グループの面々（後述）の名刺広告はまさに圧巻であり壯観でもある。橋本徹馬の威力いまだ衰えぬの感が強くここに表徴されている。

『一大帝國』はこの創刊号から大正八年二月号まで、通巻三七号出した。大正八年三月から『労働世界』に改題し、大正九年二月号、第五巻第二号で廃刊した。

この間、大正五年四月の「私唱撲滅号」と大正六年四月の「寺内内閣弾劾号・第二弾」の二回臨時増刊号を発行し、このうち後者とそれに続いた第二巻第五号（大6・4）は発売禁止処分を受けた。

発行所は一大帝國社（東京市京橋区琴平町二番地）。発行人は第一巻第一号から第二巻第二号（大6・2）までは橋本徹馬。以後は越智梅造、橋爪正、山口薫と順次交代した。定価は一八銭。頁数は平均八〇頁。

「発刊之辞」で橋本はいう。

思へば帝國は今や曠古の大機運に際会して一躍世界の指導者たらんとするの門出にあるに係らず朝に天地に則り乾坤旋転の大業を成さんとするの政治家なく野に

百年の大計を思ふて経営苦心するの国士なく寧ろ漫々たる情気は天下に充満して政界は殆ど不良老年集合所の感あるに非ずや是吾人が先づ本誌を掲げて苟しくも邦家の發展阻害せんとする旧政治家を征伐し亦有らゆる旧慣習陋習を打破して皇國の正氣を振興せしめんと欲する所以なりとす……………

また、『世界之日本』より『一大帝國』迄では、もう少し発刊に至る事情を具体的に述べている。

藩閥打破、憲政擁護、収賄事件、大隈内閣擁護、政友会打破も成程嘗ては其時々之題目として適当なりしならんも、今や此宇内の大勢の容易ならざるものを控へて相変らず国内の小問題に対する盲動を継続するが如きは最も恥づべき事……………（略）

将来の天下に対すの途の唯、皇室を中心としたる王道的世界主義に依つて立つにあるを知りぬ。余の心既に決せり、余は即ち十一月の中旬より尚病余の身を千葉県に運んで現代政治家弾劾論一卷を草して十二月三日帰京したり。昨年十二月を支那問題の爲めに多忙に過ごしたる余は辰年の新春を迎ふるに及んで、心私に決する処ありき。

要するに橋本の政治的關心が變つたのである。かつて橋本が立憲青年党を結成した当時は、時あたかも大正政變の直前、やがて第一次護憲運動は滔々としてわき起こり、政治青年の心をゆさぶった。続いて発覚したシーメンス収賄事件は、これまた政治青年の正義感と客氣を煽った。しかし、それらはいま一件落着してしまつて、彼の心をはやらせゆさぶらなくなつていた。もとより当初に目論んだ選挙権の拡張が実現したのでもなければ、彼等が打破すべきとした旧習——元老政治が無くなったのではない。皮肉なことに大隈内閣の誕生も元老の画策の結果であつた。

政治体制が基本的になつたのではないが、大隈内閣に課せられた最大課題が外交問題、なかでも「対支問題」の解決であつたことを想起すれば、この頃の世間の政治的關心が内政問題よりも外交問題に移つていたことは事実である。

おりしも、大隈内閣が成立してまもなく、第一次大戦が勃発（大3・7）、日本も参戦しドイツに宣戦布告（大3・8）、そして翌四年一月、中国に対して「对华二一カ条」の要求をつきつけて内外の世論を沸騰させたのである。

たしかに「今や此宇内の大勢の容易ならざるものを控へて」いる世情ではあつた。

殊に「支那問題」は歴代政府のアキレス腱であり、その解決は容易ではなかつた。辛亥革命（明44・10）後の中国

大陸は軍閥が横行して安定せず、西欧列強はこぞつてここに進出を企てていたから、その対応は複雑だつた。

そのうえわが国の場合、歴史的にも深いかわりがあり、いわゆる大陸浪人の暗躍もあつて国論は統一できず、深刻な政治課題であつたことはまちがいない。

もともと、そのときどきの政治課題に關心を持ち、世間の耳目を聳動させている問題に自らも合せてコミットするのが、政治家を志す政治青年の常であるとすれば、かような情勢の変化が、橋本の政治的關心を變貌させたとしても無理からぬことである。

橋本はこうして、立憲青年党綱領にまでうたつた選挙権問題や藩閥政治問題よりも、「支那問題」にいたく心を寄せ、彼のエネルギーをそこに傾注するようになる。彼はその契機を次のように語っている。

大隈内閣の外相加藤高明氏は、中国に対し二十一条の要求をつきつけた。（略）所謂支那通と支那浪人とかいわれる人たちは、皆大喜びで政府応援の演説会などを開いた。シーメンス事件当時、私の活躍に資金を提供してくれた支那浪人中の長老の一人、五百木良三先生（この方は尊敬すべき隠れた愛国者であつた）は、私も支那問題の講演会に出よと求められた。然し私は



支那問題など一向分らぬからといって断わると、分らなければ勉強すべきだ、君などが今後支那問題が分らんですむことかといわれた。

なるほどと考えた私は、先ず五百木先生の御意見を質し、次いで支那通といわれる人たち数人を訪問して、その意見を聞き、そのうち私の気持に合う部分をとって、私の意見をまとめて大劇場の演壇にたつと、私の演説が他の諸名士の講演以上に大変な拍手喝采を受けたので、五百木先生は大喜びして下さった。

(「大隈内閣時代のこと」『紫雲』昭51・1・6)

五百木良三は明治三年愛媛県松山市の生まれ。橋本と同県人である。医者免許を持ちながら俳句に親しみ、同郷の正岡子規とは俳友であった。子規に誘われて日本新聞社に入り、子規とともに『小日本』や『日本』の編集に携ったことはよく知られている。

五百木が俳句よりも国事、なかんずく「支那問題」に手を染めるようになるのは、都築七郎著『政教社の人びと』によれば、日本新聞社時代に近衛篤磨を識り、彼の知遇を得たからである。

周知のように、近衛篤磨といえは、日清同盟論を唱えて「東亜同文会」を設立したり、対露強硬論を訴えて、頭山

満らと「対露同志会」を発会させた元・貴族院議長長の要職にあった人である。その近衛の側近となれば、五百木の立場も指向したのも自ずと推測できる。

明治三十七年、四一才の若さで近衛が急逝すると、五百木も日本新聞社を辞し、近衛の事務所だった城南荘に日を過ごし、政界浪人としての道を歩み、「支那問題」の同志を糾合し、「国民義会」を結成した。

五百木良三と「国民義会」・城南荘グループの活動については『政教社の人びと』に詳しいが、「そのメンバーの主なものは、松平康園、中島気蟬、榎部荒熊、河野巳一、森田義郎、大竹貫一、橋本徹馬で、それに桂虎次郎、川島浪速、杉浦重剛、森伝、松田禎輔らが出入していた。」ということである。

こうして橋本は五百木良三の影響を強く受け、「国民義会」と手を結び、行動の歩調を合せた。『一大帝国』誌には「国民義会」のメンバーが実名であるいは「城南隠士」の匿名で常に登場し、さながら「国民義会」の機関誌の趣さえ感じさせた。第一巻第五号(大5・7)ではやくも「支那問題解決号」を特集し、「国民義会」の松平康園(早大教授)が「支那の指導権をとれ」と力説しているところに、この雑誌と「国民義会」の密着ぶりや、彼等の姿勢を体現しているといえよう。

ところで、彼が前述のように「心私かに決した処」のもは当然のことながら雑誌の刊行だけではなかった。もう一度、立憲青年党を再建し政治活動をする事だった。

そこで、一大帝国社を興こしたときによび寄せたかつての同志四人を軸に彼らと共同生活をしつつ、「国士ノ生涯ニ艱難ハ常ト心得事ノ難易ヲ問ハズ唯其是非ヲ見テ行動スベシ」(社則)の気概を以て、旗上げの日を待った。そして『一大帝国』が創刊されて半年後の大正五年九月、立憲青年党は再出発の宣言をした。第一巻第八号(大5・9)で「青年党活躍の時機」の社説を掲げ、左の綱領を発表したのである。

一、旧来の弊習を打破し、皇国の正気を振興せしむる事

一、国家の大計を定め民心の統一を期する事  
一、帝国の天職に則り、王道を四海に布く事

ここに、旧綱領にあった選挙権拡張や官僚政治打破が消えていることをいまは問うまい。それどころか、「帝国の天職に則り、王道を四海に布く」と、対外発展を期さんとした矢先き大変な「国内の小問題」が勃発し、立憲青年党はこれにかかわらざるをえない羽目に陥ってしまった。

すなわち、彼が頼みともし、恩寵も受けて来た大隈内閣が九月に瓦解してしまつたのである。そして、こともあろうに、次に誕生したのが元老・山県の直系で長州出身の軍人首相・寺内正毅とあつては、これを「国内の小問題」と黙認し、放置できなかった。なによりも大隈内閣の弾劾を上奏したのが寺内その人だと知つた以上、橋本には許すことはできなかった。

とすれば、立憲青年党にとっては、寺内内閣の打倒は当面の緊急課題であり、なにをおいてもまず手を着けねばならぬことであつた。

かくして記念すべき立憲青年党大演説会は、大正六年一月十九日神田南明俱樂部に時代革新対外発展の旗幟の下に、其第一声を揚げてより……而して今又麻布亭に会を開くこと前後六回、至る所成功を見ない所はない。〔立憲青年党活躍史(其二)大6・3〕ほどだったが、演題は「国運を阻害する元老を葬れ」、「無謀無策の寺内々閣」、という調子で寺内内閣指弾が続発し、対外発展の啓蒙よりも内閣弾劾演説会に終始したのである。

次いで第二陣として、六月一八日から二五日まで、連日都内各所で開催し、第三陣は、六年一月二二日を皮切りに、七年二月一三日まで、糾弾演説会を実に九回にわたつて敢行するすさまじさだった。

むろん、寺内内閣攻撃は演説会によってなされただけではなく、『一大帝国』誌も、あげてこのための武器として利用されいくたびか特集を組んで糾弾した。

まず、大正六年二月号巻頭社説で「元老及び寺内内閣を弾劾し、各政党の腐敗を痛撃して更に国家の大計を評論す」と一撃を加え、次の三月号も、「寺内内閣弾劾号」としてこれを追撃した。

ここでは、大隈重信が、「逆上せる寺内伯」、加藤高明が「現内閣の消極的外交」、尾崎行雄が「寺内内閣無能無暴論」をそれぞれ執筆して、大隈陣営・憲政会幹部が総出演をしているのが目をひく。

この三月号が強烈だったのは右の執筆メンバーの豪華さもさることながら、この号は特に大正六年二月二七日付の『東京朝日新聞』の一面トップに、九段抜きの大広告を打って世間に訴えたことである。九段抜きといえは紙面の三分の二を使うことになり、白抜きの「寺内内閣弾劾号」の活字はいやがおうでも人の目に着こう。さらに、臨時増刊号(第二巻第四号)、四月号と追い打ちをかけたが、さすがにこの二誌が発売禁止となったことはすでに述べた。

だからといって、それでひるみ、攻撃の手を休んだのではない。七月号は、「寺内内閣弾劾号・第三弾」として発行している。翌七年になるとシベリア出兵問題がからみ、

六月号で「軍閥打破の新運動」の特集を組み、七月号は「軍閥打破号」と銘打ち、九月、寺内内閣が倒れるまで、指弾と告発とをきびしく続けたのであった。

結局彼等は立党の基本精神たる対外発展、「支那問題」解決よりも、眼前の内閣打倒運動にエネルギーを浪費してしまつたが、大正七年初頭になって、ようやく本来の面目をほどこすチャンスが到来した。

シベリア出兵問題が話題にのほり、賛否の世論がジャーナリズムを賑わせ始めたのである。

彼らはさっそくこれを取りあげ、シベリア出兵強行の世論を喚起するために、大正七年四月八日から一二日まで、例によって演説会を催し、五月号でこれを特集し、加藤勸十あたりが「出兵反対論の迷蒙を破る」と檄を飛ばした。政府は八月、シベリア出兵を宣言。橋本も現地の視察に赴いた。

翌九月、ついに寺内軍閥内閣は崩壊した。かわって登場したのが政友会の原敬。はじめての政党内閣の出現、平民宰相の誕生ということで国民の多くはこれを歓迎した。

しかしながら、憲政会の院外団的存在であった立憲青年党にとつては政友会はいわば政敵のはずである。かつて「原敬征伐論」さえ雑誌で公言してきたことは既述した。

にもかかわらず、原内閣が成立するや、「先づ以て超然

内閣が倒れ、政党内閣の成立するに至った事を以て一進歩となし、之れを慶賀すべき事として置くの他あるまい」〔原内閣に対する我党の態度〕大7・11」と、原敬を攻撃するどころか、種々の注文こそ出したとはいえ、「慶賀すべき事」と評価しているのがおもしろい。

そして普通選挙運動が活況を呈してくる気運に乗じ「普通選挙特集号」(大8・2)を出し、やがて立憲青年党は「青年改造連盟」の一員として発展的解消し、普通選挙運動の一翼をになりにいった。

さらにこれまた労働運動が活発化するに及んで、「一大帝国」は『労働世界』(大8・3)に一変する。「皇国の正気を振興」し、「王道を四海に布く」雑誌が、「労働者の友となり、亦労働者の実情を映す鏡たらん」雑誌に変貌を遂げたところに時代の風潮と橋本の姿勢がうかがえる。

ただし、内務大臣・床次竹二郎や警保局長・川村二郎が創刊号に寄稿している事を知れば、自づとその立場は察知できよう。

ただ、この雑誌で、『一大帝国』時代から入社(大5・9)していた和田むめお(後の奥むめお)や平塚明子、山川菊枝といった婦人運動の泰斗たちが健筆を振っていたことと、宮地嘉六や平沢計七ら、労働者作家といわれる連中が小説や戯曲を発表していることは特筆しておいてよからう。

主筆は加藤勘十。尾崎は創刊号に「英国労働党首領・ヘンダーソン評伝」を寄せた他はここに発表していない。

なお、橋本徹馬は大正一三年、念願の総選挙に出馬したが落選、以後は政界進出を断念し、紫雲荘を開き青年修養道場とするかたわら時局評論家として言論活動をした。近衛首相の信任あつく、太平洋戦争直前には特命をおびてアメリカに渡ったこともある。

### 青年党の異端児

尾崎士郎が橋本徹馬とはじめて顔を合せたのは、大正六年一月七日である。この日、立憲青年党の新年会が開かれ彼も出席した。

立憲青年党の再出発の旗上げは、前項で述べたように大正五年九月であったけれども、実質的な発会式はこの日に行われたのである。

例の橋本の『自叙伝』所収の写真には、「琴平町時代の同志達」と説明が付されており、二十余人の党員が羽織・袴の正装で威儀を正して写っているのが印象的である。

この写真を見ると最前列中央に党首・橋本徹馬が写っているのは当然としても、その一人おいて左隣りに尾崎士郎が、そしてちょうどそれと対称的に橋本から一人おいた右

隣りに加藤勤十が写っているのが興味深い。

加藤勤十は明治二五年生れだから尾崎士郎より六才年長であるが、同じ愛知県の岩倉町出身であった。

家貧しくて小学校を卒業するとすぐに丁稚奉公に出され、苦学力行独学をしながら大正四年、二三才にして夜間部であったが日本大学に入学、「日本大学に其人ありと知られ、東走西奔の績を積」み「日本大学の弁士として各大学専門学校に出演」(「立憲青年党活躍史」)していた。

『世界之日本』の懸賞論文に応募し、尾崎が三位、加藤が五位に入選したことはすでに述べた。ここに奇しくも同じ愛知県人で、同じ懸賞論文の入賞者が席を並べたのである。しかも加藤もやはり、この日入党の決意を固めてやってきたのだった。

したがって、この二人は、橋本徹馬とは旧知の間柄であったとしても、立憲青年党にとっては新参者のはずである。しかるに、写真の並び位置は本来幹部か古参者の坐るべき所にどっしりと構えているのが意味深いのである。そのうえ、橋本をはさんで左右対称の場所に居るといいうのも暗示的である。

いずれにしても橋本徹馬がこの二人に格別の期待をかけ、この二人が立憲青年党の再建に馳せ参じてくれたことを大変喜んだことはたしかである。

なにしろ前にも述べたとおり、若い四人を集め「一種の悲壮なる決心」で始めたものの「当時の僕の最大の唯一の希望は四君の成長を待つ事であって、加藤(新)君が一年、他の三君は二年で一通り役に立つ人物になると予定していた」(「背水の陣一ケ年」)状態だっただけに、尾崎・加藤の参加は橋本にとって力強かった。

彼はそれをつつみ隠さず、

立憲青年党の名次第に天下に重きを為さんとしつつあるの時、何の幸ぞノ我党は又更に尾崎士郎君を得たのである。

君は六年以前からの世界之日本の読者であって三年前から僕と数回文通をしたのであったが相逢ふたのは本年正月七日、我党の新年宴会の時が初めてである。而も書面の上で兼ねて君を非凡の人傑と思ふて居た僕は、相逢ふて愈々我観察の誤らざりし事を知った。(略)嗚呼僕は何たる果報者ぞ。

と「背水の陣一ケ年」(前出)で卒直に語り、加藤勤十についても、

我党も愈々寺内々閣を弾劾して起つ事となつたのであ

るが、此大正六年の政界活躍の首途に於て我党は更に加藤勤十君を得た。君は四、五年來の僕の知人であるが、君自ら云ふ処に依ると、君の逢ふ人の内で僕の事を善く云ふた者は一人もなかつたそうである。然るに君は天下を挙げて如何に橋本さんを悪口しようとも、私は深く信ずる処があつて橋本さんと一緒に行くのですと云ひ『決して人の貴下を誉めるのを聞いて、軽々しく信じて来た者などゝは同一ではないのです』と君は言つて居る。君の如きは実に僕に取つて過分の知己であると云はねばならぬ。

と、手放して彼を歓迎した。

実をいうと「背水の陣一ヶ年」には多勢の黨員が紹介されているのだが、この二人を除いてはいずれも名前を列記する程度にとどめている。橋本の彼ら二人への期待と彼らが推参してくれたことのうれしさが、ここに如実に露呈している。

しかし、これほど囑望されていた当の尾崎士郎は――

橋本さんは『来い』といふ。声に應じて自分は今行かうと答へた。其処には何の契約もなければ、何の難づかしい交渉も無い。私と橋本さんとの関係は単に私が一

大帝國記者となる事に依て、より濃厚にもならなければ、より稀薄にもならない。私は橋本さんを知る事古き者である。同時に又深き者である。彼を知己として我を知己とする処に於て、縦令、天涯地角何んな果てに在らうとも、私は橋本さんの志を知る者である。橋本さんの事業を知る者である。(略)私と橋本氏とは性格に於ても大いに異なる。私は徹頭徹尾橋本さんと共鳴し互感する者ではない。然し乍ら唯あまりに多くの不合理に富む社会の上に僅かなりとも我々の理想を實現し度いと希んで止まない点に到て寸分の相違もない。

と、「入社に臨みて」(大6・3)で述べているように熱っぽい橋本の文章に比較して、いささか醒めていたのである。

そればかりか、彼ははっきりと、橋本と、「徹頭徹尾」「共鳴互感する者ではない。」と声明しているのは留意する必要がある。

そしてまさにその一点が「天下を挙げて如何に橋本さんを悪口しようとも、私は深く信ずる処があつて橋本さんと一緒に行く」と、文字どおり「徹頭徹尾」「共鳴互感」していた加藤勤十ときわだつた違いを見せていることも確認

しておきたいところである。

尾崎にしてみれば、再生立憲青年党が、選挙権拡張や官僚政治打破をはずしたことにとどまらず、運動の力点を外交問題におき、しかもその主張が、たとえば、「一、列強に対して日本の支那に於ける絶対的優越権を承認せしむべき事。二、南洋の占領地を永久占領と為すべき事。三、シベリヤに対しては日本の自由行動を承認せしむべき事。」

四、蒙古全体を我國の勢力範圍と為す事。」〔原内閣に対する我党の態度〕前出〕とあっては、とうてい「共鳴互感」するわけにはいかなかった。

すでに、中学時代に「帝國主義者に与ふ」を、『第三帝國』に投書し、同書でデモクラシーを学び、選挙権拡張問題には特別な関心を寄せ、売文社に出入りして社会主義の初歩さえ身につけつつあったことを省察すれば尾崎のこの言明は不思議ではあるまい。

それ故、立憲青年党の基本姿勢である「時代革新と対外発展」のうち、前者には共鳴できて、後者のそれには賛同できなかったのもこれまた、至極あたりまえのことである。そのことは「立憲青年党活躍史」（隨時発表）をひもとけばいっそう明瞭となる。

次（三番目）は早大雄弁会の新進雄弁家として名声噴

々たる尾崎士郎君であった。青年雄弁家として堂々たる風貌と美声を有し、しかも真率熱烈にして慈心仁傷あり、仏蘭西革命の由来する所を説いて、新時代の展開の曙光を唱ひ、新人の叫びを高調せる辺り、顔面少しく紅を潮して魅力ある美声、或は婉麗花の如き趣を呈し、又嚴乎として重みを加へ、而して又沈痛の力を帶ぶ。実に得易からざる雄弁と云ふべきである。未だ学生型を脱しない所あれど、雄弁家たるの素質は充分に備はり将来の大雄弁家たるを予見せしむるものがある。

右の記事は第一回（大6・1・19）の旗上げ政談演説会を総括したなかでの尾崎について報じたものである。

これを、「支那問題の根本義」（河野己一）、「東洋民族勃興の曙光」（加藤新）、「寺内々閣活路を失す」（加藤勘十）、「大道此所に在り」（橋本徹馬）等の演題と比較すれば「仏蘭西革命の由来する所」を弁じる尾崎の演説がいかに場ちがいであったかが、浮き彫りにされてこよう。

もとよりそれは、彼の演説が「未だ学生型を脱しない」からではなく、そもそも彼の関心が他のメンバーと異っていたからにほかならない。

この姿勢は、三回目の大演説会（大6・11・23）で

も、同記事が「君が宿論たる新自由権論を説」いていたと報じ、「国民義会」の地方遊説に参加（北陸・関東、大6・4・7・15）したおりでさえ、寺内政府の超然内閣を批判し、言論弾圧を攻撃しても、「支那問題」に言及することをしなかったことから、歴然としていよう。

シベリヤ出兵演説会（大7・4・7）には登壇せず、第一回普通選挙演説会（大8・1・12）では「民衆時代とは何ぞや」と題し、公然と労働党の成立の必要を強調して自らの立場を貫いたのである。

こうした尾崎の主張や立場は、なにも演説会だけではなく、機関誌『一大帝国』誌上で展開した主張においても不変であったのはいうまでもない。

もっとも、『一大帝国』を通覧してみると前述、第二巻四号・五号が発売禁止で未確認だが、彼の入社後、第二巻八号（大6・7）から一一号（大6・10）までと、第三巻五号（大7・5）から八号（大7・8）までは尾崎の名前が誌面にないので在社中、常に執筆していたのではない。

前者については第二巻一〇号（大6・9）の「編集室より」に「同人尾崎士郎は目下放浪中」とある。この時期は早稲田騒動の渦中でもあった。おそらく、そのことで奔走していたのであろう。

後者の頃は、大正七年四月七日の大杉栄企画の「露国革

命記念会」の世話人に名を連ねたり、六月二四日には長兄・重郎がピストル自殺をするといったことが彼の身辺で起きている。また、第三巻一一号（大7・11）を最後に彼の名前が登場しなくなるのは、大正七年一〇月、売文社に入社したからである。

尾崎が誌面に登場しているときは、ほぼ毎号匿名コラム「天地不語」を「段山」の名で担当し、埋草なども書いている。が、なんといっても尾崎士郎は社長・橋本が一番期待していたのだから、『一大帝国』誌が最も誇る花形記者でもあり、論客であらねばならなかった。

当然のことながら彼は同誌で堂々たる論陣を張り、いかにも気鋭の大学生らしく生硬の感は免れがたいとはいえ、東西古今の思想や潮流を博引傍証した重厚な、そのためむしろ誌風に不似合いな主張を発表して張切った。彼の論文の題名を以下列挙する

「民軍凋落の教訓——選挙権拡張の

急務を論ず——」

（大6・5）

「奴隸解放まで」

（大6・5）

「黎明時代に生きて」

（大6・11）

「英国の労働問題と国民の政治的地位」

（大6・11）

「太陽の寵児の為に——汝日本よ」



太陽の寵児よノバリモンド—— (大7・1)

「小説・白日の下に生きて△其一▽」 (大7・1)

「小説・白日の下に生きて△其二▽」 (大7・2)

「社会評論△人權問題他▽」 (大7・3)

「当代人物短評△植原悦二郎他▽」 (大7・4)

「日本は如何にして運命を打開すべき乎」

「小説・白日の下に生きて△改稿▽」 (大7・9)

「食はん乎餓えん乎」 (大7・10)

「労働運動の一新紀元」 (大7・11)

しかし、一読して他の連中が力説した「支那問題」やシベリヤ出兵問題とは無縁な論文だとは推察できよう。

実際、尾崎は「支那問題」などは眼中になく、たとえ少し時期はずれるが、『日華公論』（主筆・宮崎竜介）の大正九年七月号で——

僕をして忌憚無き言を吐かしめよ。僕はまた支那に就て凡そ如何なる意味に於ても考へてみた事すら無い。

（略）誰れやらの所謂極東の煩悶であるとか申す日支問題に就ては僕の念頭を遮ったことすら無い。要するに、僕の結論は支那思想問題に就て何等の知識も無い

れば、従つて興味も感激も無いといふ事である。  
（「社会主義者としての批判」）

と、はっきりと断言してはばからなかった。

敢えて贅言を勞するまでもなく、彼が執拗に追求し、論じ続けたのは、繰り返えし述べてきたように、選挙権問題であり、民本主義であり、労働問題であった。それ以外には、さしあたり、知識も興味も感激もなかったのである。

その意味で尾崎は橋本の期待に十分応えていないし、明かに立憲青年党の異端児であった。

一方、もう一人の期待の新人、加藤勸十の方は、演説会で寺内内閣の「対支政策の失敗」を激しい口調で詰問し、「愚劣極まる日米共同宣言」を嘲笑し、『一大帝国』誌上では「出兵反対論者の迷蒙を破る」と息まいて、橋本の期待を裏切ることなく、党の幹事として縦横に活躍していたのはまことに対照的である。

加藤に一大思想の転換が生ずるのは、皮肉にも苛烈な彼自身のシベリヤ体験（大7・9～大8・2）からである。

帰国するや『一大帝国』が改題した『労働世界』の主筆となったがあきたりず、『階級戦線の先頭を往く』（昭3・11、前衛書房）身となり、日本無産党が結成されると委員長に選ばれ、ついに戦後芦田内閣の発足に際し労働大臣ま

で歴任したという加藤勘十のその後の履歴はよく知られて  
いるはずである。

さて、この項の最後に、さきの列記にある「小説」のこ  
とを少し述べておく。

△改稿✓に付された「まえがき」によると、当初は十カ  
月くらい連載を予定し、注意人物・若き革命家の群・平塚  
の親分・病氣以後、の五章からなる長編を書くつもりだっ  
たらしい。しかし自分の怠惰などから最初の「注意人物」  
の二回だけで中断してしまったので、今度書き改める、と  
ある。が、これもわずか一回で中絶し後は続かなかった。

最初の未完の二回分に関していえば、一回目は、「W大  
学雄弁会の主催に係る予科各科懸賞演説会」で主人公が優  
勝したときの模様が描かれている。続いて二回目は、突  
然寄宿舎へ刑事が訪ねてきて、主人公が売文社へ出入りし  
ていることについて尋ねて帰ったときの様子を点描したも  
のである。

この章題が「注意人物」であることと「此一篇を母と兄  
に献ず」の献辞が添えられているのが胸をうつ。

故郷で息子の「出世」を願う母と、父の跡を継いだ（大  
5・10）ばかりの兄への献辞を添えた注意人物・尾崎士郎  
の胸中は想像するにあまりあろう。

尾崎が警保局の「特別要視察人」に任命されたのは大正

六年一二月二四日、兄が公金横領を苦に自殺したのが前  
述、大正七年六月二四日、ちょうど半年後だった。やがて  
尾崎が「政治」から「文学」へ転向するのは、それからさ  
らに数年後である。

この間、一大帝国社・立憲青年党を去った尾崎が、売文  
社に入り、社会主義者との接触をいっそう深めていったい  
きさつは別稿で論じているが、所詮デモクラシー論者でし  
かなかつた尾崎は、ここでも異端者であった。結局、彼は  
若き日に志した政治家への道は、その冷酷で醜悪な実態を  
知るに及んで断念し、そこから逃避して文学者への道を選  
んだのである。

附記 拙稿は、「尾崎士郎と平林初之輔」（愛知淑徳大学論集  
三号）と「尾崎士郎と売文社」（『風紋』十三号）との三部  
作をなすものである。なお小論執筆にあたって紫雲会から資  
料の提供を受けた。記して感謝申しあげる。（本学助教授）